

もの言う牧師のエッセー 第264話

「鳥谷同情論」

4年ぶりのBクラスに沈み4位で終わった阪神。その理由は、長きにわたり生え抜きの選手が育っていない現状を終らせようと“超変革”を掲げ、若手を中心に実戦投入し“育てながら勝つ”姿勢であったことに他ならないが、凡打やエラーなど個人的な不振はあったとは言え、今や唯一の生え抜き選手である鳥谷敬選手へバッシングが集中したのは皮肉としか言いようがない。

7月頃のそれは特にひどく、巨人ナインが甲子園に遠征した際には「阪神の選手は関西マスコミとも戦わなきゃいけないから大変だ」と同情したほど。ある巨人の主力野手に至っては「関西の町中で読まれている新聞で自分が叩かれているとか、僕だったら死にたくなる」などと怒っていた。

ここで思い出すのが今年の春に紙面をにぎわせた清原和博氏だ。彼が巨人へ移籍した1年目の97年は32本塁打など合格点の成績と言えるが、三振が多くチャンスで凡退するシーンが目立ち、今年の阪神のようにチームは4位で終わった。「清原また三振」「戦犯」などと連日のように関東マスコミから叩かれ、「俺は人でも殺したのか」と親しい同僚の前で嘆いていたという。今年も多くの政治家や芸能人らがスキャンダルで叩かれた。それはまるで公開処刑のごとくである。だが、キリストのゴスペルはこれと真逆だ。

「あなたのがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」

ヨハネの福音書8章7節。

これは、不貞の罪を犯し捕えられた女性への“石打”の公開処刑がまさに行なわれようとした時にイエスが放った言葉である。結果、彼女に石を投げる者は誰もいなかった。しかもイエスは“罪なき人”でありながら彼女を赦した。ここに究極的な神の愛がある。実は大したことない分際でありながら、まるで鬼の首を取ったように他者を断罪し騒ぎ立てるこの世の人々。しかし罪なきお方が赦しておられるのだ。神の愛の前にへりくだり、優しくなろう。

2016-10-31

